

アトリエ 琉游舎 だより 107号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2021年6月16日発行



- 梅の実を熟させる雨だから梅雨。この雨で青々と肥え堅い梅の実が、次第に黄色に紅に熟していきます。関東地方の梅雨入り平年日は6月7日のようですが、5月末から店頭には青梅が並んでいます。早速梅干しを漬けました。梅酒に梅ジュースも大量に仕込み終わりました。
- 梅の花を読んだ和歌ですぐに思い浮かぶのは「東風吹かば にほひおこせよ梅の花 あるじなしとて 春な忘れそ」という太宰府に左遷された菅原道真の歌。記憶に新しい「令和」の語源となった序文があるのは万葉集巻五「梅の花の歌」。大伴旅人が大宰府で開いた観梅の宴で詠まれた32首が掲載されています。「我が園に 梅の花散る 久方の 天より雪の流れくるかも」大伴旅人。ところが梅の実を詠んだ秀歌は寡聞にして知りません。愛らしい花や甘い香りは歌心を刺激しても、丸く堅い実は食欲しかそそらなかつたのでしょうか。
- 微笑ましい俳句を見つけました。「青梅に手をかけて寝る蛙哉」小林一茶の句です。情景が生き活きと目に浮かんできます。俗語や田舎言葉を駆使して、日常の生活感情を平明に表現している一茶の句は、芭蕉や蕪村に比べて、芸術性に乏しいと思われるかもしれませんが。
- 芸術性はさておき、この句には蛙のいのちと青梅のいのちとそれをありのままに観る一茶のいのちの交歓が17文字の中に凝縮された、生きものたちの安らぎと調和の世界があります。生きものの調和は自然の摂理です。植物連鎖の世界です。あの梅は誰かの胃袋に収まったか、蛙は蛇に食べられたか、何であれ、誰かのいのちを繋ぐためのどれもありのままの世界です。
- 今年は蛇をよく見かけます。蓮池では変わらずガマガエルの鳴き声を聞きます。昨日見かけた青大将の餌食になってしまうのでしょうか。ちなみに「権兵衛が種蒔きゃ烏がほじくる」の言葉通り、私が蒔いたインゲンの種は今年は2度とも山鳩のお腹に収まってしまいました。

6・7月スケジュール

月 火 水			木 金 土 日			
			17	18	19	20
21	22 読書会 13時半	23	24 映画会 13時半	25 居酒屋の会 16時半	26	27
28	29	30	7月1日 映画会 13時半	2	3	4 写経会 13時半
5	6	7	8 映画会 13時半	9	10	11
12	13 読書会 13時半	14	15 映画会 13時半	16	17	18
19	20	21	22 映画会 13時半	23	24	25 居酒屋の会 16時半

読書会13時半
6月22日・7月13日(火)
日蓮の「立正安国論」と消息文を読みます。テキストもすべてご用意。お気軽にどうぞ。

写経会 般若心経・自我偈・
7月4日(日) 観音偈の手本を用意
13時半 しています。

詩話会
しばらくお休みします

居酒屋の会
7月25日(日)
16時半から

映画会
毎週木曜日
13時半から

先日党首討論会と称する見世物がテレビ中継されていました。討論は互いが意見を出し合い議論を戦わせ可否得失を論じ合うものです。言葉を武器にして自説の正当性を認めさせる場です。新型コロナという見えない敵との戦いに倦む私たちの前でどのように戦うべきかを論じ合い今後の具体的な対応策を指し示してくれるだろうと、また考え方の異なる者の一対一の壮絶なバトルが見られるのではと期待と興味半分で観客席に座りました。ところが予想通りというかまたかというか、三文芝居を見せられたただけでした。57年前の東京オリンピックの思い出という茶飲み話はまさにノーガードの奇策、相手の戦意を削ぐには十分すぎるほどの攻撃でした。それまでも互いにただ空砲を虚空に向かって打つばかりで、議論の体を為していませんでしたが、この瞬間に党首甲は勝手に戦線を離脱し、それを追撃することもなくただ呆然として見送る党首乙。

討論を対話の一形態と考えるならば、党首甲と乙の間には議論も対話も存在していませんでした。対話は問いかけから始まります。その問いかけに答えようとしなければ対話は成立しません。答えようとするにはまず相手の問いかけを聞くことです。対話は聞くことから始まるのです。対話は互いの考えや思いをぶつけ合う中で何らかの共感や合意を形成していく方法です。たとえ異なる意見や立場から議論が始まったとしても、互いの意見にしっかり耳を傾けそれに真摯に答えていけば、必ずある合意点が見いだせるはずです。多くの相違点から始まり、最初は目に見えなかった合意点が、次第にはっきりと形になって表れてくる過程が討論であり民主主義の合意形成の方法です。話を聞かないということは合意形成も民主主義も拒否していることに他なりません。聞くことから私たちの日々と社会との関係が始まると言っても過言ではないのです。

仏教の経典のほとんどは「如是我聞（にょぜがもん）」という言葉から始まります。「わたくし（お釈迦様の弟子阿難）はかくの如くお釈迦様からお聞かせいただきました」という意味です。当時インドに文字文化がなかったわけではありませんが、尊い言葉は文字にせず声に出して伝えるという伝統があったのです。お釈迦様の教え（法）は対話の中から生まれました。原始仏典では、問い掛けにお釈迦様が答えるやりとりの中で教えを自然と受持していく形式のものが多くあります。それは説得や論破では全くありません。問い掛け、聞き入れ、答えるという対話の繰り返しによってこだわりが自然となくなり、大きく開かれたありのままのわたくしの中へ法がそのままに入っていきます。それが「信」です。「聞く」は「信」の門です。聞くの門から入った信は、聞き続けることでその信をさらに強固にしていくのです。「如是我聞」は文法上は私（阿難）が聞いた形を取っていますが、経を文章として読み文字情報として理解してはいけません。如是我聞の「我」は阿難だけでなくその説法に集う人たちであり、私自身でありあなたたちひとりひとりなのです。私もあなたもお釈迦様の教え（法）を聞いている「我聞」なのです。私が毎朝経を唱えるとき、それはお釈迦様の教えを誰かに聞かせるためだけに声にするのではなく、読誦された教えを私自身が「我聞」すること、それが経を唱えることなのです。如是我聞の内容を私が繰り返し繰り返し読誦し聞くことで信はありのままの「信」になります。これを「聞法歓喜」といいます。教えを聞いて心から歓喜することなのです。

「梁塵秘抄」は平安末期に当時流行した今様などを後白河法皇が分類集成した歌謡集です。2巻中1巻は仏法を説いた文章「法文歌」に分類され、法華経を謡ったものが多く、末法の世に仏に帰依する心情をなだらかな表現で歌いあげたものが中心をなしています。その一つに♪釈迦の御法は品々に、一実真如の理をぞ説く、経には聞法歓喜讚、聞く人 蓮の身とぞなる（釈迦の法はいろいろな形で真理を説いている。経にも注1あるように、法を聞いて歓喜し讚えるならば聞く人はみな仏の身となる）♪とあります。ここには法を聞くことの喜びとそれを讚嘆し供養することで成仏できると信じて生きる庶民のささやかな安らぎが表現されています。私はこの俗謡を読むと実際にどのような音調で謡われたか聞いてみたくになります。法を聞き信じそして喜び感謝するという、つまり「聞く」ことを素直に受け入れることが出来る社会に生きた人々は、たとえ苦しく不便な生活を強いられようとも、実は「聞く」声がない時代を生きる私たちよりもはるかに幸せな毎日を送っていたのではないのでしょうか。聞く声のない世界は信ずるべきもののない世界です。聞く人の不在と聞く声の不在は一体です。「聞く」と「語る」は不二だからです。「如是我聞」は私が聞き私が語ることです。私がお釈迦様の声を聞くと、同時にお釈迦様の言葉を私が語っているのです。

私たちの社会に聞くべき声が存在しなくとも、風や鳥などのあらゆる自然の声を聞くことは出来ます。ただ、現代の「声」が自然の中にしか存在できないとしたらこの社会は果たして健全といえるのでしょうか。私はテレビや新聞から聞こえてくる「音」を政治家やジャーナリストの「声」と聴くことはできません。ですからその「音」を「声」と信じることはできないのです。自然の声だけが唯一「信」に値する声だとしたら、私たちはまさしく声なき社会、つまり「法（教え）」なき世、「無法」の闇に生きていることとなります。先日の党首討論会は国会という場が、実はこの日本の中で最大のブラックホール、声なき世界であることが図らずも露呈されてしまったようです。誰も聞かない誰も語らない無法世界では、ただ音の空砲が行き交うばかりですが、それを雑音として無視し続けることは社会と断絶していることと同じなのです。鳥の声とともに目覚め虫の声とともに眠る私の安らぎの日々が、その雑音を無視することで可能な 琉游舎：戸井 出琉・恭子 日々であるならば、私はお釈迦様の弟子を名乗る資格はないはずです。 お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152 如是我聞は「聞き」「語り」「行う」ことだからなのです。 矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850